

MD研究者育成プログラム参加学生に対する支援

番号	氏名	渡航先	国・地域	期間
1	A. J	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
2	A. O	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
3	S. N	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
4	S. Y	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
5	I. Y	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/27-R1/4/29
6	S. S	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/27-R1/4/29
7	H. S	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
8	S. R	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
9	Y. T	名古屋ガーデンパレス 名古屋国際会議場	名古屋	R1/4/28-R1/4/29
10	S. S	国立国際医療研究センター 国際感染症センター	東京	R1/7/14-R1/7/15
11	S. S	三重大学 三翠ホール	三重	R1/12/7-R1/12/8
12	Y. K	福岡国際会議場	福岡	R1/12/3-R1/12/7
13	S. S	九州大学 西新プラザ	福岡	R1/12/14-R1/12/15
14	M. A	沖縄科学技術大学院大学	沖縄	R2/1/20-R2/1/21
15	N. K	沖縄科学技術大学院大学	沖縄	R2/1/20-R2/1/21

番号	氏名	渡航先	国・地域	期間
16	O. R	沖縄科学技術大学院大学	沖縄	R2/1/19-R2/1/21
17	U. Y	沖縄科学技術大学院大学	沖縄	R2/1/19-R2/1/21
18	S. Y	沖縄科学技術大学院大学	沖縄	R2/1/19-R2/1/21

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 6 年

学籍番号: *****

氏名: A・J

【活動の期間】

4 月 28 日、29 日

【概要】

4 月 28 日 移動、日本医学会総会見学、リトリート交流

4 月 29 日 ポスター、口頭発表見学、本庶先生講演拝聴、移動

【内容、成果】

2 日間ですが、良い刺激になった回でした。一番感銘を受けたのは本庶先生の講演で、研究は本質的なことを継続的に行うことが重要なのだと再認識いたしました。他にも、様々な研究を行っている学生がいると分かり、彼らとの議論を通じて知見を深めることができ、刺激も受けることができました。

【今後の抱負】

基礎と臨床の橋渡しを行う医学研究者になればと思います。

【謝辞】

今回の活動参加にあたり、岸本国際交流奨学金を提供して下さった岸本忠三大阪大学名誉教授先生に心より感謝申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 6年

学籍番号 ***** 氏名 A・O

平成 31 年 4 月 28 日～4 月 29 日にかけて、名古屋国際会議場・ホテル名古屋ガーデンパレスで行われた MD 研究者育成プログラム全国リトリートに参加した。

スケジュール

4 月 28 日(日)

14:00-16:00 学生企画「医師としてのプロフェッショナリズムを目指して」

16:20-18:00 シンポジウム「基礎医学研究者・研究医は絶滅危惧種か?」

19:15-21:15 開会挨拶・意見交換会(夕食付)

4 月 29 日(月)

9:00-10:00 学生による口頭発表(4 名)

10:00-11:00 ポスター発表(I)

11:00-12:00 記念講演 本庶佑先生

12:00-13:00 ポスター発表(II)

13:00-13:15 表彰式及び閉会式

口頭発表・ポスター発表 概要

「サッケードに伴う視覚受容野リマッピングによるシミュレーション」

頭頂葉のニューロンの視覚受容野は、眼球運動(サッケード)の直前に本来の受容野から将来の受容野に移動し、サッケード後に元に戻る(リマッピング)ことが知られているがそのメカニズムは十分に解明されていない。視覚神経系には大脳から網膜への抑制性のニューロンの逆投射が豊富に存在することから、入力を予測して予測からのズレだけを伝えることで情報量を削減する **predictive coding** の仕組みの存在が示唆されている。我々は未来予測の過程でリマッピングが自然に出現すると仮説を立て、検証のため畳み込みニューラルネットワーク (CNN) に現在の網膜像と眼球の運動方向から未来の網膜像を予測する課題を与え学習させた。学習後の CNN 内の各ニューロンの活性度を力画像ごとに計測し受容野を得たところ、ガボール状のものを含む様々な形の受容野が確認された。さらに、高次の層のニューロンではリマッピングが確認された。

私は 29 日に「サッケードに伴う視覚受容野リマッピングによるシミュレーション」の演題で口頭発表及びポスター発表を行った。多くの貴重な意見をもらうことができ、今後の研究の大きな手助けとなった。

同時に行われた日本医学会総会の記念講演として本庶佑先生・山中伸弥先生の話を聞くことができた。ノーベル賞受賞者の話を聞くことで一流の研究者のものの考え方を知ることができたと感じる。

意見交換会では他の大学の **MD** 研究者育成プログラム参加者と意見を交わすことができた。特に医学部の中でもコンピュータを用いた研究を行うものが増えていることがわかり励みとなった。

今後今回の活動の中でもらった意見を研究に活かし、自身の研究を成果としてまとめるために努力していきたい。

最後になりましたが、今回の活動に当たりご支援いただいた岸本忠三先生、岸本国際奨学金関係者に深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 5年

学籍番号 *****

氏名 S・N

活動期間 4月28日（日）～29日（月）

内容

4月28日（日）名古屋国際会議場にてシンポジウムに参加後、名古屋ガーデンパレスにて開催される意見交換会に参加し、29日（月）午前にな古屋国際会議場にて行われるポスター発表や口頭発表を見学しました。

成果

シンポジウムへの参加では、各大学のMDプログラムの現状や今後の展望について知ることができました。他の大学と共通の点、大阪大学ならではの点などこういった各大学が集まっているところでしか聞けない話も聞くことができ、非常に有意義な時間を過ごせました。私たちの活動のために様々な先生方が尽力して下さっていることに対して改めて深い感謝と、それに応えなければという気持ちも抱くことができました。それに続く若手研究者の方の講演でも、研究に大事なものは情熱だという非常に本質的なことについて学ぶことができました。日頃、研究者の先生の講演というのはもう大成された方の話を聞くことが多いので、まだ道半ばで新進気鋭の研究者の方の講演を目にできるのは貴重な機会でした。研究の進め方、身の振り方など考え方にも非常に参考になる部分が多かったです。

今後の抱負

現在私は5年生でポリクリの最中なのですが、年度末の2か月間の基礎配属に向け研究活動も再開できたらと思っています。私が取り扱っているテーマではHDAC2の阻害剤の、脳損傷モデルにおける治療効果を見ているのですが、免疫染色、遺伝子発現量、行動試験など様々なレベルで仮説が正しいか検証している最中です。望ましい結果が出ているところもあれば予想とは異なる結果が得られることもあります。その理由を考え、在学中によい結果を報告できればと思っています。

謝辞

この度はこのような貴重な機会を用意して下さい、ご支弁もいただきまして誠にありがとうございます。この場を借りて、岸本忠三先生に深く御礼申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 5 年

学籍番号 *****

氏名 S・Y

活動の概要

MD研究者育成プログラムの学生が今までの研究成果をまとめ発表し、他の大学とディスカッションすることを主目的としています。また、他の大学と交流し良好な関係を築くことも考えております。

活動の内容

28日に「医師としてプロフェッショナルリズムを目指して」というシンポジウムに参加しました。名古屋大学をはじめ、他の関連の大学から大学生時代で基礎研究の期間、アルバイトや部活/サークル、医学生と他学部との理解など様々なプレゼンを聞かせてもらいました。上記すべての経験は、将来医師なるために役立つものだと実感しております。続きましては東京大学、大阪大学等の大学の先生方々より、現在の研究者が減少している状況の中、各大学は研究医が増えるようにどのようにカリキュラムを計画しているのかを聞かせてもらいました。最後には研究を成功させるための要素やモチベーションとなるようなプレゼンテーションも聞かせてもらいました。夕方は、他の大学との交流会に参加し、研究に関する課題の他に、大学活動を踏まえいろいろと意見交換ができました。

29日では東京大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学の4大学からの口頭発表を聞かせてもらいました。各々は異なる研究テーマを発表してくれたため、繊毛や神経活動というような細胞のレベルの研究トピックスから脳の高度の画像処理機能というような総合的な仕組みも勉強できました。ポスター発表のセッションでは、自分の研究内容を他人へ説明する機会ができ、さらに他のMDプログラムの学生からも様々な研究のことを聞かせて、お互いにディスカッションすることができました。今回の発表経験やアドバイスで、今後の研究計画や動機に生かしたいと思っております。

最後に、このような貴重な機会を与えていただき、この場を借りて岸本先生をはじめ、大阪大学医学部教育センター、先生方々に感謝の言葉を申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 4年

学籍番号***** 氏名 I・Y

活動期間

4/27: 第30回 日本医学会総会（中部）参加

4/28: 第30回 日本医学会総会（中部）参加

4/29: 全国リトリート2019 参加 研究発表

活動内容

第30回日本医学会総会にて、様々な講演を聴講した。特に本庶先生の免疫チェックポイントの講演は、内容自体は様々な講義などで耳にしたことがあったが、実際にご本人の話されているところを聞いたのは貴重な経験だった。論文には出てこない苦労話、なぜそんなことをしようと思ったのかという着想点など、実際の研究現場がありありと想像でき、非常に勉強になった。

総会のプログラムとして行われた「医師としてのプロフェッショナリズムをめざして」と「基礎研究者・研究医は絶滅危惧種か？」は、特に興味を持って聴講した。前者は「医師として」とあるが、将来医学にかかわる者の境遇を仕事、プライベート、精神面など様々な面からディスカッションをする企画であった。学会本部で用意したツイッター型の参加企画であったため、医学部生同士の生の声でディスカッションができたのは非常に有意義だった。匿名性が担保されたことも、議論が活性化した要因だと考えられる。後者は研究の道に進むことの楽しさなどを強調していただいた。その一方で、研究を取り巻く難しさなどを実感したように思う。

研究発表

<背景・目的>

放射線によるDNA損傷は軽微なものであっても段階的に蓄積していき、やがてがんなどの異常を生じるものと考えられてきた。しかし、マウスを一度低線量の放射線で処理（プレ照射）しておく、高線量放射線に対する耐性が造血幹細胞に惹起されるという現象が報告されている（Yonezawa *et al.*, 2008）。しかし、この現象の機構は一切明らかになっていない。本研究ではこの現象の再現とその機構の解明を試みた。

<結果>

プレ照射により、高線量放射線ストレス後造血幹細胞の細胞周期活性化が増強されることを見出した。また、高線量放射線処理したマウスの骨髄細胞を用いてコロニー形

成能を評価したところ、プレ照射を行った場合は行っていない場合よりも有意に未分化なコロニーである CFU-Mix の形成能が上昇していた。さらに RNA-seq 法を用いて造血幹及び前駆細胞の発現遺伝子を網羅的に探索したところ、熱ショック蛋白の 1 種である *HSPalb* がプレ照射と高線量放射線照射を両方行った場合でのみ特異的に発現上昇していることを見出した。

<考察>

高線量放射線ストレス後に造血幹細胞は数を減らすため、補うために体細胞分裂を行うと考えられる。プレ照射によりこの機構がより活性化されたことは、放射線に対する耐性が誘導されたと考えられる。実際に未分化なコロニーの形成が向上していたことから、誘導性の放射性耐性機構が存在することが明らかになった。今回発見した *HSPalb* 遺伝子発現上昇が放射線抵抗性に関与している可能性があり、現在詳細の研究を進めている。

成果・今後の抱負

本研究発表は全国リトリートにて好評をいただき、ポスター発表部門優秀賞を受賞することができた。今後とも本研究を遂行し、論文化を目指して精進していきたい。

謝辞

今回の学会参加にあたり、岸本国際交流奨学金を提供してくださった岸本忠三先生、並びにスタッフの方々を始め、多くの方々に協力していただきました。心より感謝申し上げます。まことにありがとうございました。

2019 年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 4 年

学籍番号 *****

氏名 S・S

概要

この度、名古屋国際会議場にて開催されました平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリートと第 30 回日本医学会総会 2019 中部に参加してまいりましたのでご報告申し上げます。

平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリートでは、全国で研究に励んでいる医学生やそのサポートをされている先生方と、現在の活動内容などについて意見交換ができました。また現在行っている活動についてのポスター発表を行い、活動内容や研究内容への有用なディスカッションを行うことができました。

合わせて開催されました第 30 回日本医学会総会 2019 中部では、主に研究内容にかかわる国際医療の分野に関するセッションに参加し、最新の知見に触れ、また最先端で活動されている先生方と意見交換ができました。

活動の期間

○第 30 回日本医学会総会 2019 中部

2019 年 4 月 27 日(土)～29 日(月・祝)

○平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリート

2019 年 4 月 28 日(土)～29 日(月・祝)

内容

○平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリート

日本医師会総会のプログラムへの参加が終了したのち、食事をとりながらの懇親会が行われた。昨年参加した西日本医学生学術フォーラム 2018 に参加されていた学生さんも多数いらっしゃったので、その後の懇親会も合わせ、旧交を温めつつ特に中部の方々と交流する機会に恵まれた。

リトリートでは、口頭発表とポスター発表が行われた。口頭演題では、東京大学、京都大学、名古屋大学、大阪大学の 4 大学から 1 名ずつの発表があった。ポスター発表では、参加大学の学生から約 60 演題の発表があった。ポスター発表の間には昨年ノーベル医学生理学賞を受賞された本庶佑氏による特別講演を中継にて拝聴した。

○第 30 回日本医学会総会 2019 中部

セッション「4-4-2 アジアにおいて医療人をどのように育成するか？」は、廣岡 芳樹氏（名古屋大学医学部附属病院 光学医療診療部）、吉岡健太郎氏（藤田医科大学 肝胆膵内科）の両座長の下、4 名の演者の講演を通じて行われた。

林和彦氏（国家公務員共済組合連合会名城病院 消化器内科）は、特にメコン領域におけるアジアへの内視鏡技術のトレーニングを実施し続けている事例を紹介されていた。

仲佐保氏（国立国際医療研究センター 国際医療協力局）は、現在在籍されているコンゴ民主共和国での活動のみならず、今までの国際医療支援における成功例、失敗例を紹介しつつ、今後の課題や新しいテクノロジーを用いた新たな研修に関する提案をされていた。特にコメディカルの人材の研修に力を入れ、提供者、そして現地患者の資金面を考慮し、また技術を伝えた人材がさらに技術を拡大していくような活動が望ましいとされていた。

「新興・再興感染症の最先端は、熱帯地・途上国にある」と述べられた有吉紅也氏（長崎大学熱帯医学研究所 臨床感染症学分野）は、ケニアやベトナムに研究拠点を置いた経緯をご説明され、コミュニティの中で研究を行っていくという姿勢の重要性について説明されていた。特に、熱帯地域の医療は多様性に満ちており、医療を日本から提供するのみならず、研修を通じて学んだり、わかったりすることが多々あることを強調されていた。さらに、このような取り組みのみならず、グローバル医療人材を育成するというビジョンを世界に共有していく必要があることを強調されていた。大阪大学は磯博康教授が尽力された「キャンパスアジアプログラム」を通じて北京大学、延世大学とのパートナーシップを結んでいるが、長崎大学は London School of Hygiene and Tropical Medicine (LSHTM) とのパートナーシップを結んでいるという。

清水周次氏（九州大学病院 国際医療部 アジア遠隔医療開発センター）は、外科手術の遠隔教育に尽力されている。九州大学で「アジア遠隔医療開発センター」を設立され、特にアジアに対してインターネットを用いてライブ手術を行っている。外科手術の技術の進歩とともに、情報技術も高度に発達している。それを活用しながら、世界の反対側の国々ともいとも簡単に、かつ無料で実施することができている。九州大学は韓国・ソウル大学で行われる外科手術を医学生が視聴し、英語で質問するというインターアクティブな講義を実践している。

制度面、技術面の進展に伴い、各々が持つ強みを世界で生かすことができる環境も整備されつつあるように思う。まだまだ世界を舞台に活躍することを当たり前にしにくいのが医療分野の現状であろうが、今後は大きくその現状も変わっていくことであろうと思われた。

セッション「4-1-2 世界と比べた日本の医療制度」は長谷川敏彦氏（未来医療研究機構）を座長のもと開催された。

まず、座長の長谷川氏より、本トピックへの話題提供が行われた。明治初期に日本が海外から医療を学んだ当時から、日本、そして世界の医療現場の状況は大きく変わっている。特に日本では、少子高齢化に伴い、入院者数や原因疾患が大きく変化した。若年層の死亡者数は大きく減少しており、「普通死」が増えているといえる。その中で、医療の現場を病院から生活の中に移すようなシステムを考慮する必要があり、このような医療制度を整備することは日本のみならず世界の医療制度の構築へと貢献することへとつながる。

長谷川友紀氏（東邦大学 社会医学講座）は、特に 1900 年代以降起こった医療事故/事件などを取り上げつつ、それぞれの再発防止としてどのような世論があがったり、制度が作られてきたかを取り上げていた。

平尾 智広氏（香川大学医学部 公衆衛生学）は、主に人口動態について着目しながらそれに伴う今までの医療制度の変遷について説明された。特に戦前、戦後では大きく制度が変わっており、戦後は高齢者への保障に大きく舵がきられている。今後は少産多死という社会上例を見ない状況へとようになっていくため、死亡と障がいの双方から見た資源配分が重要になるとのことであった。

近藤 正英氏（筑波大学医学医療系 保健医療政策学・医療経済学）は、日本の国民皆保険のみならず、世界中の医療費のサステナビリティが脅かされていると主張された。これはユニバーサル・ヘルス・カバレッジの観点からも、日本は特に厳しい状況に立たされるようになってきたともいえる。その中で、民間保険への取り組みを検討することも必要になってくると捉え、民間保険に強制加入を義務付けるスイスの制度などを例示しながら検討されていた。ドイツ、フランスも部分的に民間保険を導入している。

日本の現状のみを見てみると、将来を悲観するような見方が大きいように感じる。しかしながら、世界、特にアジアに目を向けると、日本以上に複雑な事情を抱えている国は多い。Hans Rosling, Ola Rosling 両氏が以前の TED Talks で述べている通り (https://www.ted.com/talks/hans_and_ola_rosling_how_not_to_be_ignorant_about_the_world?language=ja)、社会における現状をしっかりと理解するためには、しっかりと現状を見据えながら、適切な対応をとるために活動をしていかなければならないと改めて感じた。

セッション「2-2-5 ヒトの老化は制御できるか—抗老化研究の最前線」は鍋島 陽一氏（（公財）神戸医療産業都市推進機構 先端医療研究センター）を座長に行われた。

今井眞一郎氏（ワシントン大学医学部（ミズーリ州セントルイス） 発生生物学部門・医学部門（兼任））は Productive Aging という概念について解説され、NAD World に重要な SIRT1 や NAMPT について解説された。SIRT1 は生存に必要な変化を起こすように脳内で発生するが、結果的に老化の遅延、寿命延長に寄与するという。

片桐 秀樹氏（東北大学医学系研究科 糖尿病代謝内科学分野）は糖尿病へのご専門であるが、NF- κ B の作用調整により膵臓 β 細胞のみならず全身の臓器の老化予防効果を有し

ていると考えられるようになった。代謝経路は全身で連動しているので、1つの臓器に代謝因子が変化すると、全身の変化が起こると考えられる。それにより、新たな代謝因子を獲得したり、また肥満などの疾患での因子を制御する必要があると考えられている。炎症などといった生体反応を制御したり、それを恒常性が維持できるような方法に用いることができるのではないかという考えを呈されていた。

星 美奈子氏（公益財団法人 神戸医療産業都市推進機構 先端医療研究センター 神経変性疾患研究部）認知症において、ASPDの蓄積は病態と強く相関することを発見された。また、神経型ナトリウムポンプ(NaK α 3)への変異が認知症に関わることを解明されており、ASPDは神経細胞外に分筆され、これが発現する神経細胞のアポトーシスを引き起こしている。これが認知症に寄与しているとされている。

健康長寿とは漠然とした概念であったが、今では特にその重要性が強調されている。今回のセッションもその注目度を表すかのように、きわめて基礎的な内容であったものの、立ち見が大量に発生する満員御礼のセッションとなっていた。次回の日本医師会総会が行われているときにはまた新たな発見がなされていることだろう。それを実際にどのように患者さん、すなわち社会に還元するかどうかは非常に重要なことと思われた。

セッション「LS-23 日本から革新的な医療機器を創出するには？～シリコンバレーから学ぶ～」は廣岡 芳樹氏（名古屋大学医学部附属病院 光学医療診療部）が座長のもと行われた。演者は以前循環器病学の講義にも登壇された池野 文昭氏（MedVenture Partners 株式会社/スタンフォード大学循環器科 Japan Biodesign (US)）であった。

まず、イノベーションの定義を説明されたのち、医学におけるイノベーションはどのような場面から生まれるのかということを説明されていた。特に循環器学の分野では、初期研修医を終えるタイミングが最もイノベーションのアイデアを生みやすいタイミングなのだという。このタイミングで、「長い医師の生涯教育の中で、イノベーションを生むことができるような姿勢をとり続けるためにはどうしたらよいか」という質問をしたところ、池野氏は「まずは気づいたこと、間違えたことをしっかりと書き残しておくこと、そしてイノベーションを具現化する方法を学生の間に学んでおくこと」と説明されていた。

セッション「3-5-1 医師としてのプロフェッショナリズムをめざして」は、本学会唯一の学生企画であり、学会公式アプリを用いたインターアクティブな方式をとっていた。

木村 宏氏（名古屋大学 ウイルス学）のセッションでは、名古屋大学の学生が課外活動として実施している研究活動についてプレゼンテーションを行っていた。時間、資金、労力がかかる学生の研究であるが、医学生も研究について興味を持ったようで、聴衆も基礎研究に触れる意義を再確認していた。

林 祐太郎氏（名古屋市立大学 小児泌尿器科学）のセッションでは、名古屋市立大学の医学生たちが部活動や学際の実験についてプレゼンテーションをされていた。聴衆の意見としては、これらが医師の育成に役立つかどうかはあくまで本人次第であると感じたという結果が出た。

春日井邦夫氏（愛知医科大学 消化管内科）のセッションでは、医学生にとって重要な臨床実習期間を「医の思春期」と定義し、その際に必要/不要な意識の持ち方や心構えについて考察されていた。

佐々木ひとみ氏（藤田医科大学 腎泌尿器外科）のセッションでは、藤田保健衛生大学医学部の女子医学生が、女医としてのキャリアやライフプランなどについて取り上げていた。特に結婚や出産についての考察に詳しいアンケート調査などを行っていた。提案としてとても新鮮なものであった。

とくに全国の医学生の意見を交わす場面は、リトリートはあれども研究をしていない学生との接点は少なくなってしまう。このような機会を通じて同年代の医学生の意見を聞くことができたのは興味深い経験であった。大学内の縦のつながりも大事であるが、全国における横のつながりも重要であろうと思われるので、このような機会を大事にしたい。

セッション「4-4-3 患者受け入れと医療者派遣のメリットとデメリット」は神馬 征峰氏（東京大学大学院医学系研究科 国際地域保健学教室）を座長のもと行われた。

まず座長である神馬氏は、グローバルヘルスの定義に基づいた中での持続可能な開発への取り組み、そしてその困難についての紹介をされていた。グローバルヘルスの概念の根本は、「世界で起こっている問題を解決すること」に焦点が置かれているとのことであり、通常ならば切り離されてしまうような人々の問題に目を向けることが大切であるという。その中でも、その問題に自ら解決策を練ろうとしている人たちは多く（**positive deviation**）、そのような人たちからも支援者が学ぶような姿勢も重要であるとのことであった。私たちが現在議論をするために利用しているデータは 30 年ほど古いため、現状にしっかりと目を向けて支援を行っていく必要があるとのことであった。

宮原 良二氏（名古屋大学大学院医学系研究科 消化器内科学）は、名古屋大学消化器内科学のアジアにおけるトレーニング実施の取り組みについて説明されていた。先日プレゼンテーションを拝聴した林和彦氏のお弟子さんに当たられるとのことで、昨日の林氏の内容をより詳しく語っておられた。特にフエ医科大学における内視鏡検査・治療に関する取り組みを取り上げておられた。現在はウェブ会議システムを用いながら症例検討会などのトレーニングを継続して行っているという。

和田 耕治氏（国際医療福祉大学医学部 公衆衛生学）は、ベトナムにおける医療人材育成についての経験を語られていた。多忙の中でのトレーニングに対する事前準備やフォローアップ、コミュニケーションの困難などに対する教訓をお話されていた。また、研修

生を日本にも受け入れており、もちろん困難はあるものの、病院としてのその経験はインバウンド対応にも有用であるという意見を呈されていた。

南谷かおり氏（りんくう総合医療センター 国際診療科）は主にインバウンドの患者について説明されていた。今までは外国人が来訪していなかった場所にも外国人が訪れていたり、国際イベントが日本で多く開催されるなど重要度は増している。しかしながら、外国人を受け入れるための整備は非常に遅れており、その対策は急務である。関西に関しては、今までは成田が圧倒的に外国人入国の玄関口となっていたところが、関西国際空港がLCC (Low-cost Carrier)の就航に伴い非常に増加しているという現状もある。ハード面、ソフト面におけるりんくう総合医療センターの取り組み、そして大阪大学医学部附属病院における制度面での取り組みについて紹介されていた。

成果

○平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリート

普段訪れるような学会では同じ分野の方々にしか出会うことができないが、今回は非情に多岐にわたる分野の教員の先生方や学生の皆様と意見交換をすることができた。そのため、外部から国際医療という分野がどのようにみられているのか、ほかの分野の方々はどこに興味を抱くのか、また甘い部分はどこなのかなどをフィードバックとしていただくことができた。

○第 30 回日本医学会総会 2019 中部

特に国際医療の分野に関しては、日本の医療・医学業界がどのように進展していくかといったビジョンが、本分野の学会内外の視点から議論されており、全体像を把握することに大きくつながったと感じている。

今後の抱負

全国の医学生たちの多岐にわたる取り組みに触れることは、大きな刺激となった。特に京都大学からは2年生が数多く参加していた。2年生とは、いわゆる大学に入学してから丸1年のみしかたっていない学生たちである。実際に研究に携わっているのはさらに短期間であろう。その中でしっかりとプレゼンテーションができるところまで仕上げてくる学生がここまでも多いとはとても驚いた。

私も2年生の時に本リトリートに参加させていただいたが、その当時に比べてもとても優れた解析をされている学生が多いように感じた。改めて研究という分野には年齢は関係なく、自らの成果をだすことが一番であるということを再確認した。今年は勉学で忙しい時期になるが、しっかりと自らができることに積極的に取り組んでいきたいと感じた。

一方で、全国を見ても国際医療という分野を研究分野として取り組んでいる学生はまだ少ないように感じた。本リトリートでは国際医療という分野で演題を出していたのは私の

みであった。それが私の強みであると考えればその通りなのかもしれないが、まだ学問領域としての認識が十分されていないのではないかと不安になる部分も大きい。とはいえ、日本医師会総会では柱の1つとしても取り上げられており、注目度は高い分野でもあるように感じている。Socialなテーマであることから、社会に対する貢献度への期待も高い分野でもあるのだろう。引き続き継続して研究として取り組みを続けながら、機会ある度に発表を続けることも大切なのであらうと改めて感じた次第であった。

謝辞

末筆となりましたが、このような機会を恵んでくださりました岸本忠三大阪大学名誉教授に最大限の感謝を述べさせていただきます。誠にありがとうございました。並びに本誌助成金採択に関わってくださりました皆様に感謝申し上げます。また、この経験がここまでも有意義になったのは、日々ご指導いただいている先生方のおかげであると実感しております。特にその中でも大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座/大阪大学医学部附属病院の中田研教授とスタッフの皆様、大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンターの酒井規夫教授、本多智佳特任准教授、富澤理恵特任講師とツインリサーチセンター事務局の皆様、りんくう総合医療センター国際診療科の南谷かおり医師、名倉功二医師と医療コーディネーター、医療通訳の皆様にご感謝申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

— MD 研究者育成支援事業 —

医学部医学科 4年

学籍番号*****

氏名 H・S

【活動期間】 2019年4月28日(日)～4月29日(月)

【概要】 名古屋国際会議場にて開催された第30回日本医学会総会 2019 中部に参加し、各種企画やシンポジウム、特別講演に出席した。また、自身の研究内容についてのポスター発表を行った。平成31年度MD研究者育成プログラム全国リトリートに参加し、全国の医学生と基礎研究についての意見交換や、医学・医療についてのディスカッションを行い、親睦を深めた。

【内容・成果と今後の抱負】

医学会総会では、各種企画・シンポジウム・特別講演に参加しました。学生企画「医師としてのプロフェッショナルリズムを目指して」では、企画と連動したアプリを通して、自身も意見を出す形で参加しました。医学部の学生生活や授業、将来のキャリアプランについて、全国の医学生の主張を聞くことで、自身の将来について新しい考え方を取り入れることができました。シンポジウム「基礎医学研究者・研究医は絶滅危惧種か？」では、各大学の教育システムと基礎研究者育成のためのプログラムについて、知ることができました。本庶佑先生の特別講演も印象的で、貴重な経験となりました。

また、29日には「大腸における tuft 細胞の機能解析」というテーマで、自身の研究についてのポスター発表を行いました。諸先生方からご意見をいただき、今後の研究方針についての考え方に幅が生まれました。また、他の学生のポスター発表も見ることができ、様々な研究手法や他分野の動向について学ぶ機会を得ました。

MD 研究者育成プログラム全国リトリートでは、基礎医学に関心を持つ医学生達と交流できたことが最大の収穫でした。お互いの研究テーマについての意見交換はもちろん、広く医学・医療についての考え方や将来の進路などについて、有意義なディスカッションを行うことができました。

今回の全国リトリートおよび医学会総会に参加したことは、基礎研究について考える上で大きな刺激となりました。今回得た新たなアイデアを取り入れながら、これからも MD 研究者育成プログラムでの活動に励みたいと思っております。

【謝辞】

この度の活動に際し、岸本国際交流奨学金からご支援を賜りありがとうございました。岸本忠三先生をはじめ、関係者皆様に心より御礼申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 4年

学籍番号***** 氏名 S・R

概要 日本医学会総会への出席及び MD 研究者プログラム全国リトリートへの出席

内容

一日目 日本医学会総会における、MD 研究者プログラムについての発表を聞いた。また、夜は全国の MD 研究者プログラムに参加している学生や先生方との会食に参加させて頂いた。

二日目 MD 研究者プログラムリトリートへ参加し、全国の学生の発表を聞くとともに自らのこれまでの成果について発表させて頂いた。今回のリトリートで非常に印象に残ったのは、京都大学の2-3回生がかなり積極的に MD プログラムへ参加しているということだった。自分は2回生の時には、将来についてあまり真剣に考えておらず、MD プログラムへも参加していなかったもので、非常に感心したとともにかなり後悔した。また、他の学生の発表を聞くことで自分の研究に対するモチベーションを再確認した。

また、午後の部では、本庶佑先生の講演を聞く機会を頂いた。本庶先生の話聞くことで、やはり免疫が基礎医学の中でもっとも面白いということを再確認した。また、癌免疫に非常に興味を持った。

このような貴重な機会をくださった、MD プログラムの関係者の方々及び岸本忠三先生への謝辞でこの報告書を締めたいと思う。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 3 年

学籍番号 ***** 氏名 Y・T

● 概要

平成 31 年 4 月 28 日および 29 日に名古屋国際会議場で行われた『平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリート』および『第 30 回日本医学会総会 2019 中部』に参加いたしました。『平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム全国リトリート』は「時間細胞は経過時間の符号化のために最適化されているか」というテーマでポスター発表いたしました。『第 30 回日本医学会総会 2019 中部』では本庶佑先生や山中伸弥先生をはじめ、様々な分野の先生方の講演を聴講いたしました。

● 成果

全国リトリートにおけるポスター発表は表彰こそされませんでしたが、数人の方に発表して理解をしていただくことができました。また他の医学生がどのように研究に取り組んでいるかを知り大いに刺激を受けました。さらに将来基礎研究に進む上でどのような進路を取るべきか、ということなども医学生同士で議論することができました。

医学会総会では様々な分野の方が発表をしておられ、最新の研究成果だけでなく、どのような心構えで研究をすべきか、という考えも知ることができました。

● 今後の抱負

今回のポスター発表の内容は論文化できないという判断をしたものでした。現在は計算神経科学の分野での新たなテーマおよび機械学習を用いた解析の研究を行っています。今後はこれらの研究に取り組み、一歩先の研究をしていきたいと思っています。

最後となりましたが、ご支援くださいました岸本忠三先生ならびに医学振興银杏会の方々に心から感謝いたします。

平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム参加者向けの岸本国際交流奨学金

訪問先での活動概要

氏名 S・S

大阪大学大学院医学系研究科 国際未来医療学講座
大阪大学医学部医学科 4 年次

この度、本奨学金の助成を受け、国立国際医療研究センターにて 7 月 14 日、15 日の 2 日間にかけて開催されました第 23 回日本渡航医学会学術集会に参加させていただきましたのでご報告申し上げます。

目的・内容

2019 年、大阪では G20 サミットやラグビーワールドカップが開催されることもあり、訪日外国人の一層の増加が見込まれるうえ、入国管理法の改正に伴い、在留外国人の人数はさらに増加するものと思われる。このため、インバウンドに関する最新の情報を本学会で収集することは有用であると考えた。

また、2019 年からは医療通訳士認定制度が翌年の東京オリンピックを見据えて稼働し始める重要な機会である。医療通訳の設定などに関する学会は本学会を含め全国は 4 つしかなく、また、稼働が始まって間もなく本トピックを議論することができる学術集会を開催しているのは本学会のみである。今後の活動への有用な示唆を得るために本学術集会に参加することは有用であると考えた。

今回の集会では、活動の性質上、得た知識をすぐに現場に還元することが肝要である。現在、環境医学・公衆衛生学実習を通じて、国際医療の最先端の現場でそれを生かすことができる環境にある。今回は発表をしないものの、今後の研究活動を最大限現場に還元できるように、学生ながらもシームレスに導入することへと務めることが期待される。

また、これらの総合的な活動を通じて、次年度にて予定している世界保健機関(WHO)本部でのインターンシップにて、受け身に学ぶだけでなく自分のスペシャリティを生かしながら活動ができるようになることを合わせて期待したい。

活動の期間

2019 年 7 月 14 日(日)～15 日(月・祝)

行程報告

7 月 14 日(日)

特別講演 1 “Trends in international travel medicine over the years”

国際渡航医学会(International Society of Travel Medicine: ISTM)の会長を務められる Leo Visser 氏による特別公演が、本集会の目玉として開催された。オランダのライデン大学の教授を務める Visser 氏は、主にご自身がお住まいのオランダにおけるトラベルクリニックの現状や課題などについて言及され、西欧特有の保険会社などといった民間セクターの活動についても言及されていた。特に予防接種の料金に関して、一部の保険会社は顧客獲得のために費用を負担する会社のプランなどもあるようで、予防接種に関する意識は西欧ではさらに高まっており、本分野が世界的に貢献できる部分は非常に多いと言及されていた。

特別講演 2 『新興・再興感染症に備える ゲートウェイとしての沖縄から』

沖縄では数年に 1 回のペースでのインフルエンザが流行している。温帯では冬季に流行、亜熱帯では夏で流行する。熱帯では一年を通じて流行している。東南アジアに夏休みに行く際にはインフルエンザワクチン接種を推奨している。日本へのウィルスの持ち込みを防止するという側面もある。沖縄が本土への感染のゲートウェイと化している。沖縄が亜熱帯、熱帯化することで、南半球のワクチンを用いるなどといった対策が今後必要になる可能性がある。

冬の疾患が夏に院内感染することも多い。沖縄は新興感染症対策の現場となりうるといえる。以下の 3 点に注目して取り組みが行われている。

1. 水際における感染対策の強化。
2. 集団の特性に応じた対策を検討。
3. ハイリスク者の重症化を予防。

特に沖縄は観光客やへき地が多く、特徴的な立ち位置にあり、必要となる地域医療が全国的に特殊であるといえる。同じく、日本は島国という特殊な国であり、国としてのアウトブレイクなどへの対策に沖縄の経験を役立てることができるものと思われる。

沖縄県では麻疹が昨年広がった。これは本土からの感染者が渡航したことによるものだった。台湾からの旅行者での感染者の症例では、初期研修の初診で麻疹が鑑別に挙がったものの、2 時間 19 分待合室で待つこととなった。院内では感染が行われなかったものの、より短縮する取り組みが必要となる。

当時、医療機関から行政に求めたこととしては、どのようなときに感染を疑うのか;感染を疑うときにどう行動するのか;患者の対応を医療機関に調節することの3点であった。特に、医療現場との調節においては、生活支援などの依頼などが含まれ、逆に患者からは隔離の協力が必要となる。ワクチン回数不定者へのキャッチアップ就職麻疹についてのエビデンスを構築、診療所外来と病院救急の役割分担なども今後は課題となる。

減った人口の倍以上を若い外国人労働者が補っている現状がある。介護領域では莫大な数の流入が想定されており、日本のアジア化が進んでいくものと想定される。労働力を補うだけでなく、多様性を獲得できる時代となってくると考えられる。しかしながら、高齢者施設は感染症に非常に弱い状況である。外国人の受け入れを行っている台湾では毎年のようにデング熱のアウトブレイクがある現状がある。調査によれば、これは外国人労働者が里帰り帰国をしたところから持ち込まれたものとみられる。しかし、日本ではそのようなアウトブレイクは見取れていない。これは、怒っていないというよりも診断できていないのが現状であり、保健所に届け出ても注意喚起などがなされることはない。現在はかにかまれることに対して無頓着になりつつあるが、意識を改めて高める必要がある。予防接種の追加接種や確認を行う、定期的な健康診断を行う、帰国後の健康観察の実施などを行っていく必要性があり、場合によっては同じような手段を日本人に対しても行う必要がある。

一般口演1 トラベルクリニック1

「りんくう総合医療センターにおける黄熱ワクチンの接種状況」では、公衆衛生学実習にてご指導いただいている名倉功二医師がりんくう総合医療センターにおける黄熱ワクチンの接種状況と副反応について報告され、他の文献に比べりんくう総合医療センターでの安全性は高いものとして報告されていた。ディスカッションでは、生ワクチンの併用接種において、MMRのみは他の生ワクチンとの緩衝作用がある可能性が示唆されているが、本研究の段階では同時接種の例はなく、影響は想定されないと議論があった。日本のみに存在しているMRワクチンの緩衝作用に関する文献は乏しく、今後の研究課題として想定される。

「土日運営の渡航外来（トラベルクリニック）の実際」では、博多駅前において土日も営業している小児科兼トラベルクリニックに関する報告があった。需要は高いものの、どのように地域の中で運営していくのが課題となるとのことであった。また、狂犬病ワクチンのグロブリンは国内では入手困難であるため、基本的には犬に噛まれた国で投与をされたフォローアップができるような体制を整えることが狂犬病の診療にあたりじゅうようであるとのことだった。

「当院に新規開設したワクチン渡航外来における受診患者の分析」では、成田赤十字病院にて昨年より開始された予防接種外来についての報告があった。周りにそのような病院がないこと、海外からの輸入ワクチンにも対応していることで海外赴任者、留学生をはじめとした多様な方々に接種を実施しているとのことであった。

「外国渡航および疾患予防に対する日本の承認ワクチンの必要性、安全性の検討」では、神戸大学の岩間健太郎教授らのグループによる承認ワクチンの安全性などに関する研究結果が報告された。日本では総じて副反応などを含めた有害事象が少ないが、コントロールを置くことが困難であるため、国内で承認されているワクチンを接種した患者をコントロールにするなど研究設計における議論なども上がった。また、りんくう総合医療センターにおける報告と同様、主体的に副反応などの聞き取りを行っているわけではないため、定性的な研究内容として報告するためには丁寧な患者へのフォローアップが必要になるという議論もあった。

一般公開シンポジウム「検疫所で働くということ」

検疫記念日に合わせて開催されたシンポジウムであった。こちらは他のプログラムとの兼ね合いもありあまり長時間聴講できなかった。私が聴講した際には勤務経験者が検疫所での業務やそのキャリアについて説明されていた。島国であることから水際作戦も極めて特殊な日本だが、その戦略は国境が陸続きになっているほかの国にも応用できるものが多いそうで、そのような取り組みに関する共同研究を他国とも行うようなこともあるという。物理的な業務が多い印象があった検疫所だが、研究におけるキャリアとしても興味深いと感じた。

シンポジウム 4：「トラベルクリニック部会企画」海外と日本をつなぐトラベルクリニック～旅立つ人に安全を～

「世界の医療事情 ～現地で肌で感じる生きた医療情報～」では、在英日本大使館に勤務する金武和人医師が、海外における現地の事情を調べる際に外務省が発表している「世界の医療事情」という情報公開ウェブサイトを活用する必要性を強く示されていた。また、海外渡航の際に何かがあった際には外務省の「旅レジ」が有用となることもあることから、こちらに登録することは強く推奨されていた。

「日本のクリニックとの連携」では、UAE のドバイにて診療を行っている福田淳子医師によるドバイでの日本人診療についての紹介があった。宗教が異なるなどの制度面での困難がある一方で、自らの処方されている薬を英語で伝えられないこと、トラベルクリニックについて無知であることなど、事前に渡航前に知ることができるはずである知識が欠如している日本人が多いことも問題であると指摘されていた。

「トラベルクリニック診療に必要な海外医療情報と活用方法」にて三島伸介医師が問題提起されていたのは、渡航先が推奨しているワクチンが日本において承認の場合などといった例であった。その際にはどのような説明を試みるか、どう対処するかなど、世界レベルで考える際には困難な例が多いことを示されていた。

「海外の邦人医師とのネットワーク構築」では、海外で働く日本人医師に対して行ったアンケート調査の結果を紹介されていた。こちらでも主に日本人渡航者や、その渡航者の健康

管理を行う日本の医師の理解不足などが言及されていた。日本国内で申し送りがきちんとしていない例や、紹介状が日本語で書かれている例など、患者や外国の医師に配慮できていない事情についての紹介や、自らの健康状態や処方薬などでさえ英語で言えないような日本人渡航者について、さらなる教育が国内でも必要であろうと言及されていた。

懇親会

懇親会では、平素より大変お世話になっている南谷かおり医師や中村安秀医師らと改めて情報交換を行った。南谷先生とは基本的に別の会場に行っていたため、互いが得た知見を交換することは非常に有意義であった。来年はこの渡航医学会をはじめとし、熱帯医学会、国際保健医療学会、国際臨床医学会の4学会合同大会が大阪大学で行われることになっており、南谷先生は渡航医学会の大会長を務められる。合わせて、国際保健医療学会の大会長は中村先生になることが決まっており、今後は学生主体の企画なども考案していくとのことであった。

その他にも、大阪大学に以前は在籍されていた先生方やそのお知り合いの方々ともお話することができた。今回の学会には大学のみならず一般の開業されている医師の方々も多く参加されており、視野が広がった。

7月15日(月・祝)

シンポジウム6:「企画:インバウンド委員会 共催:国際臨床医学会」 外国人医療をめぐるパネル・ディスカッション:信頼と安心の医療通訳制度をめざして

こちらのパネルディスカッションでは、4月1日より施行された医療通訳士認証制度についてのアカデミックな公開討論という形式がとられていた。まず、中田研氏(大阪大学医学部国際医療センター・国際臨床医学会理事)による制度の運用方法の概要、その見通しなどについての紹介があり、厚労省研究班の研究者である糸魚川美樹氏(愛知県立大学外国語学部)からいわゆる「マイナー言語」への制度の対応についての説明がなされた。沢田貴志氏(港町診療所)は横浜における医療通訳コミュニティの現状、森田直美氏(全国医療通訳者協会:NAMI)は全国医療通訳者協会の現状や今後の展望、ルルデス・エレーラ氏(大手前大学国際看護学部)は医療現場から検討した制度への懸念などの問題提起をされた。

この後、パネリストによる公開討論が行われた。ここでは、認証制度に対する懸念について森田氏を中心として中田氏へ追求していく様相をとり、特に今まで医療通訳を実施してきた通訳者たちをどのように扱うのか、という点についての懸念が上がっていた。また、最後のフロアからのディスカッションでは、学会レベルでの制度をどのような法的な整備につなげていくのか、数少ない医療通訳をボランティアベースで活用していた地方における制度をどのように活かしていくのかなどといった疑問があげられていた。

白熱した議論が続いたが、最終的にはファシリテーターの中村安秀氏により、「新しい制

度には光と影がある、その影にも目を向けながら制度を前に進める必要がある」というまとめの下で閉幕した。

一般口演 9 インバウンド 1

「3 菌種のカルバペネム耐性グラム陰性桿菌とバンコマイシン耐性腸球菌が検出された医療ツーリズムの症例」では、本田なつ絵氏がベトナムから日本に訪れた患者による耐性菌のアウトブレイクについて報告された。入院 2 週間後にベトナム語で記載された紹介状に耐性菌についての記載があることが分かり対処したが、1 年にもわたりアウトブレイクとして続いたという。

「医科大学附属病院における中国からの渡航患者の受診事情」では、姜波氏が川崎医療福祉大学における中国人の栄養指導の症例を 3 つ紹介されていた。今までに 16 症例ほどしか医療通訳事例がないとのことで、今後は幅が広がるかもしれない。

「韓国の外国人医療実態調査 ～医療目的渡航者の受入体制整備の観点から～」では、李祥任氏が韓国のメディカルツーリズムに関する取り組みについて紹介されていた。韓国では主にロシアなどからのメディカルツーリズムの事例が多く、空港からの送迎まで含めた医療ツアーとして国を挙げて取り組んでいる。

「国立台湾大学病院の国際医療センターにおける医療研修報告」では、中田えいみ氏が国立台湾大学病院の国際医療センターについて紹介されていた。業務は専属看護師 6 名により行われ、年間 2000 名ほどの患者受け入れ数があるという。中国からの中国語が話せる例が多いため言語のサポートが主となる日本とは現状が異なるが、国際共同研究の支援などといったアウトバウンドも合わせて行うなど包括的な取り組みがなされているとのことであった。

シンポジウム 7:「トラベラーズワクチン委員会企画」 海外渡航者のためのワクチンガイドライン/ガイダンス改訂版 2019 について

本シンポジウムでは、タイトル通り海外渡航者に必要となっているワクチンガイドラインの改訂などについて各演者が講演されていた。まず、田中孝明氏が 2010 ガイドラインからの改訂までの道のりについて言及し、目まぐるしく変化するトラベルワクチンに関する現状についての解説があった。

以降の演者は主たる変更点の各論について解説された。「狂犬病ワクチン 国内外の動向」では、西園晃氏が、近年発表された文献に伴う狂犬病ワクチン接種方法についてのエビデンスについて紹介され、特に暴露後接種の頻度とタイミングの変更について解説された。

「日本脳炎ワクチン 国内外の動向」では、三島伸介氏が特に本ワクチンを接種していない対象者について、海外渡航前にワクチンを接種する必要性を説明された。特にアジア

圏で日本脳炎が土着しており、海外とのワクチンギャップを着実に埋めていく必要がある。

成果

まず、医療通訳士認証制度が開始されてから初めて開催される国際医療の4大会であった本会に参加できたことは非常に有意義であった。制度が開始される前、そして開始された後にわたり、議論において変化が生じた部分、生じていない部分について改めて理解が深まった。いずれにせよ、本制度を取り巻く諸課題は、アカデミックなものやイデオロギー的なものとしてしっかりと精査したうえで、絶えず更新していくことが必要であると考えた。

加えて、目下翌週にはびわ湖国際医療フォーラムにおける私自身の発表も控えている。今回も様々な演題を聴講することで、自らのプレゼンテーションを作成するためのさらなる磨きをかけるためのヒントを数多く得ることができた。

また、来年は上記4大会の合同大会が大阪大学吹田キャンパスにて開催される予定である。以前合同大会には参加したことがあったが、渡航医学会として個別に参加した経験はなく、ほかの学会ともまた異なる雰囲気を感じ取ることができた。これら4大会のうち、学生部会を持つのは国際保健医療学会(学生部会：JAIH-S)のみであり、渡航医学会においても学生の参加は極めて少ないことが把握できた。一方で、医師、コメディカルなどの医療現場に実際に従事されている方の参加はとても多く、今後なんらかの合同企画をなすためには特定の層を対象として企画を行うのか、それとも幅広い層を対象とするのか、明確に検討しながら議論を進めていく必要があると感じた。

トラベルクリニックは国際医療においても非常に特殊な部類ではあるものの、それぞれの4大会が行っている活動はよりシームレスになっており、それぞれの学会がその専門性を如何に深めることができるかという点に注力できるのではないかと考える。それぞれの異なるカラーを理解し刺激を受けることは、今後の活動に有用であると感じた。

今後の抱負

日本渡航医学会は、どちらかといえばクリニカルな学会に近く、医学生として参加しているのは私が見渡す限り私のみであった。そのため、全体的に研究スキームや取り組みの内容がとても刺激的に感じられた。成果でも述べたとおり、学会としての垣根はそれぞれの学会間で非常に低くなっているように感じられ、幅広い内容の研究が今後も促進されていくであろうと感じられた。今後は学会としても学会員の発表内容や抄録の書き方などについての強化育成に取り組む方針ということなので、学生という早いタイミングで参加し、学ばせていただけるということは非常にありがたいことだと感じた。

海外に渡航する日本人の健康のみならず、日本を訪れる外国人の健康に関する動態についても注目度はさらに高まっていると感じられた。しかしながら、日本を訪れる外国人患者の統計は乏しく、今後も引き続き研究を続けることで私自身も微力ながらも貢献できる分野なのではないかと考える。基礎医学と社会的な観点からの調査に携わり続けることで、多面的な視点から日本の医療に貢献できるよう、今後も日々の学びや研究活動に邁進していきたい。

謝辞

末筆となりましたが、このような機会を恵んでくださりました岸本忠三大阪大学名誉教授に最大限の感謝を述べさせていただきます。誠にありがとうございました。並びに本助成金採択に関わってくださりました皆様に感謝申し上げます。また、日々ご指導いただいている大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座/大阪大学医学部附属病院の中田研教授とスタッフの皆様、りんくう総合医療センター国際診療科の南谷かおり医師、名倉功二医師と医療コーディネーター、医療通訳の皆様にも感謝申し上げます。

平成 31 年度 MD 研究者育成プログラム参加者向けの

岸本国際交流奨学金

訪問先での活動概要

氏名 S・S

大阪大学大学院医学系研究科 国際未来医療学講座

大阪大学医学部医学科 4 年次

この度、本奨学金の助成を受け、三重大学にて 12 月 7 日、8 日の 2 日間にかけて開催されました第 34 回日本国際医療保健学会学術大会に参加させていただきましたのでご報告申し上げます。

目的・内容

日本国際保健医療学会 (Japan Association for International Health) は、「国際保健医療学に関し、会員の研究発表、知識の交換並びに会員相互間及び関連学会との研究連絡・連携の場となり、国際保健医療の進捗普及に貢献し、もって学術文化の発展に寄与すること」を目的とする学会である。したがって、国際医療を MD 研究者育成プログラムにて修める私の研究分野に合致する学会であるとともに、研究成果の発表を積極的に検討すべき学会であるといえる。

今回は、演題発表として、海外の医学部を卒業してから日本の医師国家試験を受験している学生について発表する。現在、国家試験受験者の約 2 パーセント弱まで占めるようになってきた認定・予備試験合格者の中には、海外の医学部を卒業し日本での医師免許の取得を志している学生も数多く存在するようだ。その中でも、日本人医学生への入学の門戸を 10 年以上開き続けているハンガリーの医学部に通っている学生たちに対する調査について発表する。具体的にはハンガリーのトップの大学であるセンメルヴァイス大学医学部と本学のカリキュラムを比較し、在学者の声などを紹介しながら海外でのカリキュラム内容や医学生の生活について紹介する。

また、来年は国際医療のメジャー 4 大会が合同で行うグローバルヘルス合同大会が開催され、日本国際保健医療学会もその 1 つに当てはまる。来年の学会にむけて、演題発表だけでなく、今年の学会から学べるものをしっかりと得てきたい。

本演題を通じて、日本の医学部卒業者以外で日本で医師免許を取得する人材への対応などについて議論を深めるきっかけとしたい。海外で学んでいる医学生を考慮しないことは現実的に難しいであろうという認識を深めていただき、建設的な議論がさらになされることを期待したい。

活動の期間

2019 年 12 月 7 日(土)～8 日(日)

行程報告

12 月 7 日(土)

一般講演 2 医療政策 1

本セッションでは、各種活動にてお世話になっている近畿大学・安田直史教授や国立国際医療研究センターの職員らによる口頭発表が行われた。取り扱われている内容は主に途上国における政策に関わる内容で有り、途上国における人材育成のアセスメントや理解などについての発表が行われていた。座長の進行により、政策提言という形で各発表がまとめられることが求められ、聴衆を含めた総合的なディスカッションが行われた。

一般講演 4 人材・教育 1

本セッションでは、私に加え、大阪大学人間科学研究科において UNESCO Chair を担当している小笠原理恵助教と国立国際医療研究センターの職員による発表が行われた。取り扱われている内容は主に日本人の教育に関わる内容で有り、日本人医学生、日本の看護師、日本の研究者における教育に対する内容が発表された。双方の発表は対象は違えど、抱えている課題は似通っており、それぞれの発表に対して、発表者同士で質問が飛び交うなど活発なディスカッションが繰り広げられていた。

教育講演 国際保健医療における研究倫理審査と研究成果の公表 ～フィールド経験の説得力のある発表のために～

本セッションでは、本学会における倫理審査委員会が発足することに伴い、学会雑誌の編集委員らによる発表と紹介が行われた。主に被検者の権利、利益相反、出版の際の注意点の3本建ての講演であった。特に倫理審査委員会を通じて承認された研究に対しては本会の学会誌への投稿を積極的に推奨しており、活動報告の質を高めることを目標とし、さらなる投稿数の増加を期待するとのことであった。

総会

主な承認事項として、前述の教育講演において話し合われていた倫理審査委員会の発足などが承認された。

学生部会 2 助産師の役割と限界 ～妊産婦自身の力を引き出すために必要なこと～

本セッションでは、学生セッションとして、途上国における母子保健を助産師からの視点について講演が行われた。講演の後、参加者のグループワークとフィードバックが合わせて行われた。

ポスター発表

ポスターは多彩にわたり、栄養指導への介入研究から現地での活動報告、外国人医療の実態など多岐にわたっていた。

シンポジウム 3 外国人も住民です！外国人から見た日本の地域医療の課題

本セッションでは、各種活動にてお世話になっている甲南女子大学・大阪大学名誉教授の中村安秀先生が座長の元、外国人医療の実態として医療通訳の現状に関する報告が主に行われていた。三重、名古屋をはじめとした東海地域における医療通訳の育成や使用に関する実態から始まり、大きく患者の権利やその根拠となる法整備、各種プロトコルのげんかいを示す事例など多岐にわたるプレゼンテーションを通じて医療通訳の実態の紹介がなされていた。最終的には医療通訳に留まることなく、外国人診療における概念的理解やコミュニケーションの方法までフロアを交えたディスカッションが発展した。

懇親会

本日のプレゼンテーションに興味を持っていた方々や、上記のセッションでのディスカッションを通じて興味を抱いてくださった方々と主に交流を行い、フランクな様式にて議論をさらに行った。

12月8日(日)

学生部会 3 SDGs x 企業 ～健康的な人と地域を作る～

本セッションでは、学生セッションとして、途上国における母子保健を助産師からの視点について講演が行われた。講演の後、パネルディスカッションが行われ、SDGs への取り組み方のマインドセットや、国際保健のキャリアを志す学生へのメッセージなどが提示されていた。

緊急セッション 中村哲医師追悼上映

本セッションは、先週アフガニスタンにてお亡くなりになった中村哲医師の追悼イベントとして、中村医師を特集した“Water, not Weapons”という NHK Global のドキュメンタリー番組が昼休みの空き会場を利用して上映された。中村医師の活動に改めて思いを馳せるとともに、その思いを引き継ぐ当学会において、その意義などを考えることは極めて有意義な事項であった。会場では中村医師に思いを寄せ、涙ぐむ参加者も多くみられ(何を隠そう私自身もその 1 人である)た。

特別講演 2 市民公開講座

本セッションは、大会の目玉として、市民公開講座に半導体工学の研究によりノーベル賞を受賞した天野浩氏による講演が行われた。

成果

今回は自らも口頭演題を行ったが、目下翌週に国際臨床医学会における発表も控えている。今回は様々な演題を聴講することで、自らのプレゼンテーションを作成するためのさらなる磨きをかけるためのヒントを数多く得ることができた。また、本テーマにおける本学会の関心もそれなりに高いことがわかり、発表をした意義があったのではないかと思われる。

来年は 4 大会の合同大会が大阪大学吹田キャンパスにて開催される予定である。4 大会のうち、現段階で学生部会を持つのは国際保健医療学会(学生部会：JAIH-S)のみであり、その活動内容などについて把握でき、また自らの中でその問題点なども整理することができたものも有意義であったと思っている。合わせて、本学会に同じ目的にて参加していた、来年以降発足する日本熱帯医学会の学生部会の代表を務められる方ともお話をすることができ、上記の内容などを確認したり、様々な打ち合わせを各セッションの合間に行うことができた。

日本国際医療保健学会は、ほかの 3 学会に比較し、包括される範囲が幅広いように思われる。今回の総会にて本学会での倫理審査委員会が発足し、研究活動にもさらに弾みがつくことが期待される。これを通じてフィールドでの経験をしっかりと文字に残すことができる雑誌が国内でも確立されたことになり、今後の活動の幅が広がることにもつながると思われる。

今後の抱負

東京オリンピックが来年に控えてきており、外国人診療に対する対応が佳境であると思われるが、研究としては、それ以降の社会に視野がどんどん移っているように感じら

れる。今回の学会のセッションでも数多くテーマとして挙がっていたSDGsをはじめとし、外国人とともに生き、ともに持続可能に成長していくという視点がより前面に押し出されるようになってきたと感じている。私たちとしても、目の前の研究に挑む際、その内容に没頭するだけでなく、その研究意義を見つめ続けながら、社会的な意義を考え続ける必要があると感じている。

これは研究のみに限られた話ではないが、何かに光をあてると、その影は絶対に生じるものである。この光の部分のみに目を向け続けるのではなく、影の部分にも目を向け、考えを巡らせることが、今後の研究でも臨床でも必要になってくるものと思われる。

来年はグローバルヘルス合同大会として、4大会が1つのまとまった大会として開催される。東京オリンピックが終わったのちに、グローバルヘルスの一端を担う身としてどのようなメッセージを発するべきなのかをさらに考え続けていきたいと思う。

謝辞

末筆となりましたが、このような機会を恵んでくださりました岸本忠三大阪大学名誉教授に最大限の感謝を述べさせていただきます。誠にありがとうございました。並びに本助成金採択に関わってくださりました皆様に感謝申し上げます。また、日々ご指導いただいている大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座/大阪大学医学部附属病院の中田研教授とスタッフの皆様、りんくう総合医療センター国際診療科の南谷かおり医師に特に感謝申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 2 年

学籍番号 *****

氏名 Y・K

【概要】

学会名：第 42 回日本分子生物学会年会

日程：2019 年 12 月 3～7 日

発表演題名：制御性 T 細胞の発生過程におけるエピジェネティック変化の推移

活動目的：ポスター発表にて上記の演題名にて発表を行うとともに、幅広い研究分野の発表から最新の研究結果を学び、知見を深める。

【スケジュール】

12 月 3 日	移動、学会参加
12 月 3～6 日	学会参加
12 月 7 日	移動

【内容、成果】

今回の学会を通して、たくさんの学術的な知見が得られ、さらに全国の研究者の発表を見聞きすることによって発表についての技術も学べることができました。分子生物学会においては、カバーする分野が実に広く、日頃研究として扱っている分野はもちろん、馴染みのない分野についても最新の研究結果を知ることができ、分子生物一般に対する興味が深まりました。また、ポスター発表を行うのは今回が初めてでしたが、様々な研究者の方と議論することができ、今後の研究に活かしていけると思いました。

【今後の抱負】

初めて学会に参加、発表することによって、たくさんの刺激を受けることができました。研究の内容はもちろん、研究結果をいかに分かりやすく広く伝えられるか、という発表の技術の面でも、さらなる研鑽を積んでいきたいと思います。

【謝辞】

今回の活動を進めるにあたり、岸本国際交流奨学金を提供して下さった岸本忠三先生、並びにスタッフの方々を始め、多くの方々に協力していただきました。心より感謝申し上げます。

2019 年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 4 年

学籍番号 *****

氏名 S・S

概要

この度、九州大学西新プラザにて 12 月 14 日に開催されました第 4 回国際臨床医学会学術集会(URL: <http://icm2019.umin.jp/index.html>)に参加し、口頭演題発表を行ってまいりましたので、ご報告申し上げます。

国際臨床医学会 (International Society of Clinical Medicine)は、「国際臨床医学会は、国際臨床医学の診療や研究に携わる多領域の医療従事者及び研究者が集まり、国際臨床医学をより学術的な面から追求していくこと、その活動を通じて国民にとって有益な医療の発展を目指すこと及びその成果を広く社会への普及に努め、その医療を担う人材を育成し、国内外の本分野の医療・研究の指導的な役割を果たすこと」を目的とする学会です。したがって、国際医療を MD 研究者育成プログラムにて修める私の研究分野に合致する学会であるとともに、研究成果の発表を積極的に検討すべき学会であるといえます。

昨年度に引き続き、本年度も参加に際し口頭演題にて発表を行いました。今年からは医学生セッションが新たに増設され、国内外の医学生とともにプレゼンテーションを行いました。このプレゼンテーションでは、本プログラムを通じてかねてより継続していたインバウンド患者の解析に、公衆衛生学実習にてさらに得ることができた知見を融合して報告しました。また、来年は本学会が合同大会の一環として大阪大学にて開催されるため、学会の流れを把握し、打ち合わせなども行いました。各種セッションでは、全国の医療機関における外国人診療に関する問題点を議論しました。

活動の期間

2019 年 12 月 14 日(土)

内容

特別講演 外国人患者の受入れ体制に関する厚生労働省の取り組み

鈴木 貴士氏（厚生労働省 医政局総務課医療国際展開推進室 室長）より、本分野に関わる厚生労働省の取り組みが紹介されていた。

本講演は会場の最も大きなホールで開催されていたが、それでも立ち見が出ており、本分野への関心の高さがうかがわれた。

総会

総会は、まず、中村安秀理事の提案に基づき、本学会が開催された九州大学、そして福岡高校をご卒業された中村哲医師への黙祷から開始された。

以降、予算案など懸案事項は全て参加者により承認された。

一般口演 4 医学生セッション

本セッションは、今年から新設されたセッションである。その中では唯一の日本人医学生としての発表を行った。

ほかの演題としては、海外の留学生に対する医学教育の際のコミュニケーションの問題点などについて国際医療福祉大学の品川なぎさ氏から発表があった。また、ミュンヘン大学 Prell Tobias 氏からはドイツの医学教育におけるグローバルな学習機会についての発表があった。

そのような中で、私は今年の成果を発表した。演題名は『「在留」「訪日」外国人患者分類による統計量の課題と対策』とし、全国において統計的基準があいまいであることにより生じる可能性のある誤謬を実証した。発表は時間通り終えることができ、東京大学の山田秀臣講師から「医療機関ではどのような取り組みを行うべきだと考えるか」という質問をいただいたので、初診・問診におけるシステマチックな情報収集が必要だが、その際にも注意点がいくつかある旨を回答した。

要望演題 4 海外医療派遣、国際研究

本セッションでは、ツインリサーチセンターにて共同研究を行っているブラジル・サンパウロ州のサンタクルス病院・西国幸四郎先生が日本と行っている共同研究について紹介されていた。応援に駆け付けたが、あいにくセッションの時間が詰まっていたようで、質疑応答はなく発表は終わった。とはいえ、関心度は高かったようで、こちらでも立ち見が多いセッションとなっていた。

要望演題 5 医療保険と未収金問題

こちらのセッションでは、全国の幅広い病院から外国人診療を行う際の問題点などが紹介されていた。特に、外国人診療により疲弊している病院の実態が浮き彫りとなり、今後は外国人を積極的に受け入れないとする病院の悲痛な声が上がっていた。その疲弊のよりどころをどこに見出すかについては意見が分かれており、未収金の回収のための保障制度がしっかりしていないという体制的な問題や、ノウハウがまだ蓄積できていないという問題も指摘されていた。特に訪日外国人に関しては急性疾患が多く、海外旅行保険を通じた治療費の支払いなどもあり事態が複雑になりがちであり、注目を集めていたが、日本に長らくお住まいの方でもこのような問題が生じる可能性があるとの指摘もあり、今後も制

度を含めた議論が肝要である。

オープンフォーラム 世界を舞台に保健の仕事しよう！

この学会では毎度おなじみとなった本セッションでは、例年と同じように国際機関に働くためのエントリーに関する講演が行われていた。現在 WHO 環太平洋事務局にて人事のトップを務められている Eric Tagnon 氏からは、エントリーの際に、CV を含めすべての書類においては要点を抑えた簡潔な書類が好まれるということを強調されていた。

企画3 地域別に見る外国人診療への様々な取り組み

こちらのセッションでは、各医療機関のみならず、自治体、国、アカデミアなどの経験を通じた取り組みが紹介されていた。私の発表と近しい演題としては東京大学の山田秀臣先生が発表されていた外国人分類についての発表があった。経緯は違えど、問題意識とその解決策については方針として近しい結論にたどり着いていたが、やはり厚労省などの保有情報などに基づく考察は厚みが異なる。ほかにも、北海道大学病院のピーターシェーン氏による北海道の現状なども報告されており、現在はダイナミックに外国人診療に関する状況が国内でも変動しつつあることが見て取れた。

全員懇親会

全員懇親会では、各医療機関、アカデミア、企業の方々などとも様々な交流を行うことができた。特に、先週に引き続き、ほかの学会の学生部会の学生とも打ち合わせができたことは有意義であった。来年の合同大会のための挨拶も先生方から行われ、この学術集会が終わるにつき、来年度の合同大会が始まるのだという方針がより明確に強まった。

成果

本会では、新たな研究テーマの発掘並びに同分野における人脈形成につながった。前述の通りほかの学生をはじめとして、国立国際医療研究センターの研究者の方々ともお話をすることができ、今後の解析にも役立つことが期待される。

今回の発表した演題は、リサーチクエスト、研究計画を立てるところから自ら行い、最後の発表まで繋げることができた。先行研究もほとんどなく、方針を立てることなども困難だったが、最終的には 1 つの形にまとめ上げることができ、それをこのような学会で発表しながらディスカッションを行うことができたことは、私自身としては非常に大きな成果であったと感じている。

今後の抱負

この学会には、1年生のころから発表などを行いながら参加させていただいている。その当初からは学会の参加者も増え、今年は374名が参加したとのことであった。本学会への注目度も高まっており、一層この分野における研究の社会的意義が向上するものと社会から期待されているとの自覚を持ちながら、引き続き研究活動に励みたい。

成果では、今回の内容を1つ初めから終わりまでやり切ったと書いたが、これはあくまでまた新しいスタートなのではないかと感じている。今回発表した内容も、ある意味解決策を見出すことへとは完全に繋がってはいない。何らかの根拠となるデータを示し、それに基づき現場で試し、成果が生まれて初めて1つの研究内容が完結したことになる。もちろんその後のフォローアップも必要で、逐次アップデートを行う必要もあろう。そう考えれば、今後もこの分野についてさらに大規模な解析・研究を進める足掛かりとして、今回の成果を生かしたい。

来年はグローバルヘルス合同大会として、4大会が1つのまとまった大会として開催される。東京オリンピックが終わったのちに、グローバルヘルスの一端を担う身としてどのようなメッセージを発するべきなのかをさらに考え続けていきたいと思う。

謝辞

末筆となりましたが、このような機会を恵んでくださりました岸本忠三大阪大学名誉教授に最大限の感謝を述べさせていただきます。誠にありがとうございました。並びに本誌助成金採択に関わってくださりました皆様に感謝申し上げます。また、この経験がここまでも有意義になったのは、日々ご指導いただいている先生方のおかげであると実感しております。特にその中でも共同演者としてご指導いただいた大阪大学大学院医学系研究科国際未来医療学講座/大阪大学医学部附属病院の中田研教授、山崎慶太特任准教授、プレゼンテーションやディスカッションを通じて有益なご助言をいただきました田畑知沙特任准教授、中谷大作特任准教授とスタッフの皆様に感謝申し上げます。

また、今回の研究は、公衆衛生学実習の一環を通じて行った部分もありました。こちらでご指導いただきましたりんくう総合医療センター国際診療科の南谷かおり医師、名倉功二医師、新垣智子看護師と医療コーディネーター、医療マネジメント課の皆様、医療通訳の皆様に感謝申し上げます。

最後に、本テーマについて研究・解析に同意していただき、快くご協力いただいている患者の皆様、そしてプレゼンテーションやディスカッションを通じて日々有用なご助言をくださっている皆様にも、この場をお借りして感謝申し上げます。今後とも引き続き、変わらぬご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 5 年

学籍番号 *****

氏名 M・A

この度は、岸本国際交流奨学金をご支給いただき、岸本忠三大阪大学名誉教授、諸先生方に厚く御礼申し上げます。頂いた奨学金により、貴重な経験となる活動を実施できました。以下にその活動の実施内容を報告させていただきます。

【テーマ】

The 2nd Osaka University-OIST Symposium への参加

【期間・場所】

2020/1/20～2020/1/21

沖縄科学技術大学院大学（OIST）、沖縄県恩納村

【スケジュール】

2020/1/20 伊丹空港 9:00 発、那覇空港到着

マイクロバスにて OIST へ移動

13:30～18:10 シンポジウムにて聴講

OIST 内宿泊施設にて宿泊

2020/1/21 8:45～15:00 シンポジウムにて聴講、ポスターセッション、OIST 内見学

マイクロバスにて那覇空港へ移動

那覇空港 18:00 発、伊丹空港到着

【内容】

大阪大学医学部と OIST の間で交流提携が組まれており、その一環として OIST にて開催された交流シンポジウムに参加しました。シンポジウムでは大阪大学医学部の教授方と OIST の生命科学系研究者からの最先端の研究内容を聴講することができました。講演後は、ポスターセッションにて自身の MD 研究者育成プログラムにおける研究成果を発表する機会があり、英語で OIST の多くの海外出身研究者と議論を交わすことができました。最後に、OIST 内の研究環境を見学する機会もいただきました。

【成果】

シンポジウムの講演では、OIST 研究者から医学に限らず、海洋生物のゲノム研究など非常に多岐に渡る研究内容を聞くことができ、自身の知見を広げる良い機会となりました。また、大阪大学医学部の教授方の研究内容については、実はあまり落ち着いて聞く機会がなかったため、学内でどういった研究が行われているのか深く知ることのできる機会ともなりました。

講演後のポスターセッションでは、OIST の研究者らと活発な議論を交わすことができました。発表演題も多くはなかったため質問もしやすく、研究者同士の交流には最適な雰囲気でした。OIST 側のほとんどは海外出身の研究者だったため、英語での発表・質疑応答であり、英語の勉強・訓練をすることもできました。

全体を通して最も印象に残ったのは、OIST 内の環境でした。留学生が多いということとは聞いていましたが、むしろ日本人は教員・学生ともに少数派であり、大学内は本当に海外の研究機関となっていました。公用語はほぼ英語で統一され、行き交う研究者たちも様々な国出身であり、国内にして海外の研究環境に身を置くことのできる極めてユニークな大学であることを理解しました。さらに、潤沢な研究資金から最先端の共用機器も揃っていました。大阪大学医学部との交流提携により毎年 OIST ヘイインターンに行く機会があるため、後輩にもぜひその機会を活用するように勧めていきたいと思っています。

【抱負】

今回のシンポジウムを通して、国内ながらも異国文化での研究発表や研究環境を体験することができました。この貴重な経験を通して、自身の研究に対する知見も広げることができたと思っております。ポスターセッション内では有益な研究情報も交換できましたので、今回の活動で得たものを研究活動に活用していきたいと思っています。

末筆ではございますが、岸本忠三大阪大学名誉教授に改めて感謝申し上げるとともに、本シンポジウムを開催していただいた先生方、運営担当者の方々に厚く御礼申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

— MD 研究者育成支援事業 —

医学部医学科 5 年

***** N・K

活動の期間: 2020 年 1 月 20 日～2020 年 1 月 21 日

活動の概要: The 2nd Osaka University-OIST Symposium

活動の内容: 上記学会でのポスター発表を行いました。発表内容は以下の通りです。

表題: Distinct role of the 182nd amino acid residue between HIV-1 and HIV-2 capsids in CPSF6 binding

概要:

CPSF6 binding of viral capsid(CA) is strictly conserved among primate lentiviruses(PLVs). The CPSF6 binding interface locates to PLV CA N-terminal domain as well as its C-terminal domain, especially 182nd amino acid (lysine; K). Therefore, introduction of K182R mutation into HIV-1 CA diminishes CPSF6 binding. In contrast, we recently found that HIV-2 CRF01_AB isolates(NMC842) with K182R mutation in CA. Here, we examined the impact of the K182R mutation on CPSF6 binding among PLVs.

We found that CPSF6-358 sensitivity of NMC842 virus was comparable to that of HIV-1. We therefore introduced K182R mutation into HIV-1 and HIV-2 lineage viruses and found that CPSF6-358 sensitivity of HIV-1 lineage viruses was greatly decreased by the K182R mutation, that of HIV-2 lineage virus was minimally affected.

K182R mutation has limited impact on CPSF6-358 sensitivity of HIV-2 lineage, suggesting a distinct role of the 182nd amino acid residue between HIV-1 and HIV-2 CAs in CPSF6 binding.

活動の成果: 本学会の演題の多くは免疫学・神経科学の分野の最先端の研究であり、難解な部分も多々ありましたが、教授の先生方の演題はどれも目を見張るようなものばかりで、大変勉強になりました。特に自らの研究分野にも関係するリンパ球の分野においては、ILC という近年発見された細胞系列や、HIV の Reservoir として重要と考えられている Th17 の分化因子である JunB についてなど、興味深い研究に触れることができました。また、ポスター発表では見てくださった方とディスカッションする機会が得られたほか、神経科学の分野のポスターで興味を持った”hidden proteome”という概念についてのポスターでは著者の方と直接話すことができ、interactive なポスターセッションという大変貴重な経験をいただきました。このような得難い貴重な経験を支援して頂いた岸本忠三大阪大学名誉教授に、この場をお借りして深く御礼申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

大阪大学大学院医学系研究科 病理学講座 病態病理学

大阪大学医学部医学科 5 年生

***** O・R

この度、沖縄科学技術大学院大学（OIST）にて開催されました第2回大阪大学・OIST 合同シンポジウムに参加させていただきましたので、ご報告させていただきます。

【目的】

沖縄科学技術大学院大学（OIST）は5年一貫制の博士課程を置く大学院大学です。教員と学生の半数以上を外国人とし、教育と研究は全て英語で行います。OIST の教育研究活動は学際的で先端的なものです。



(OIST HP より)

現在、大阪大学医学部と OIST との間では連携協定を締結しており、研究・人材交流を促進するためにジョイントシンポジウムを定期的を開催することとしています。昨年は第1回が1月に大阪大学にて開催され、今回は第2回として今年1月に OIST にて開催されることになりましたが、OIST の先生方や石井優先生を始めとする本学の先生方のご厚意の下に、本学医学部学生に本シンポジウムでの発表の機会をいただき、MD 研究者育成プログラム参加学生として参加させていただける運びとなりました。

【内容】

合同シンポジウムの内容は以下に示す通りでした。主に Neuroscience、Immunology、cutting-edge technologies including imaging の3分野についての先生方の研究成果についての講演と、OISTの大学院生、大阪大学医学部の学生によるポスター発表が行われた。

キャンパスツアーではOSITの最新鋭の実験機器・研究施設を見学させていただいた。大学内は建物から学生にいたるまで、まるで海外にいるかのような錯覚を覚える程であった。

Day 1

January 20th (Mon) 2020

Time: 13:30-18:10

13:30-13:40	OIST Provost. Mary Collins	Greetings
Chair: OIST Provost. Mary Collins		
13:40-14:10	OIST Prof. Hiroki Ishikawa	“Regulation of T cell functional states by AP-1 transcription factors”
14:10-14:40	OIST Prof. Erik De Schutter	“Modeling the cell biology of learning”
	Break	
Chair: Osaka University Vice Dean Masaru Isii		
14:55-15:25	Osaka University Prof. Toshihide Yamashita	“Development of therapeutic strategies to repair neuronal network for the central nervous system diseases”
15:25-15:55	Osaka University Prof. Kazuyo Moro	“Role of group 2 innate lymphoid cells in idiopathic interstitial pneumonias”
15:55-16:25	Osaka University Prof. Yukinori Okada	“Statistical genetics, disease biology, and drug discovery”
	Break	
Chair: OIST Prof. Erik De Schutter		
16:40-17:10	OIST Distinguished Prof. Tomoyuki Takahashi	“Multi-disciplinary approach to presynaptic black box”
17:10-17:40	OIST Prof. Bernd Kuhn	“Voltage imaging from Purkinje neurons in awake animals”
17:40-18:10	Osaka University Prof. Shigeru Kitazawa	“In search of allocentric coordinates-where they are and how they image”

Day 2

January 21th (Tue) 2020

Time: 8:45-13:40

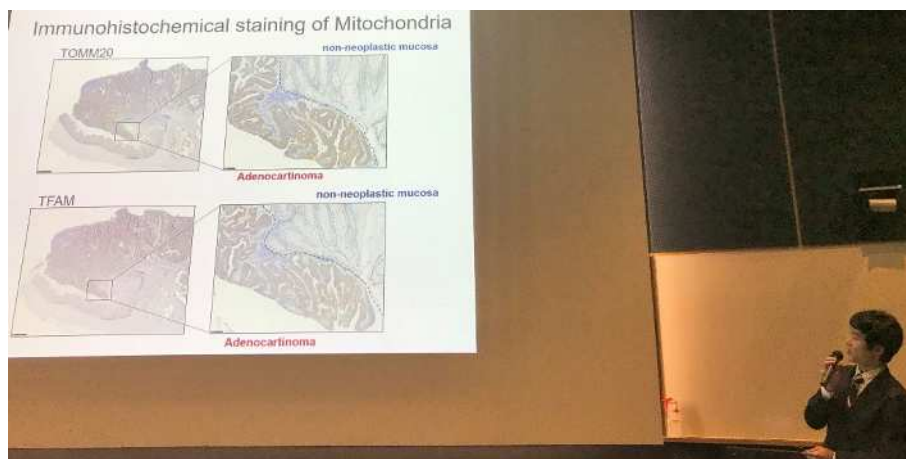
Chair: Osaka University Dean Eiichi Morii		
8:45-9:15	OIST Dr. Charlies Plessy	“Rapid changes of gene order in closely related species of Oikopleura zooplankton”
14:10-14:40	Osaka University Prof. Makoto Sato	“Neucortical neurons develop neuronal circuits for cooperative tasks by multiple-targeting with collateral formation”
	Break	
Chair: OIST Dean of Research Tadashi Yamamoto		
10:25-11:25	Flash talk by poster presenter (2min/person)	
11:25-11:50	Business Meeting on Osaka-OIST collaborations	
11:50-12:00	OIST Dean of Research Tadashi Yamamoto	Closing Remarks
12:00-13:40	Lunch & Poster presentation	
13:50-14:50	Campus Tour	
15:00	End	

【成果と今後の抱負】

OISTの先生方の講演は、医学者としての研究とはまた違った角度で人体を見ておられており大変興味深いものでした。OISTでは、分野ごとに大学院を分け隔てていないということもあり、化学、工学、情報学などの理系のあらゆる科学技術が生物研究に応用されやすい環境にある印象を受けました。どれも普段の講義ではまず得られない貴重な研究成果を聞かせて頂くことができました。

本学の先生方がどのような研究に取り組んでいらっしゃるのかについても改めてこの機会に伺うことができたのは大変喜ばしいことでした。低学年で基礎医学を履修していた際に研究のお話をして頂いた先生方もいらっしゃいましたが、臨床系の講義もすべて修了したこのタイミングで再度基礎研究について伺うと、先生方の研究の意義や成果の偉大さ、重要性の受け止め方がまるで違いました。また、最近着任された先生方の研究成果もこの機会に聞かせて頂くことができたのも大きな収穫でした。

ポスター発表では想像以上に質問を多くいただき、特に技術的な解析方法についてアドバイスをいただけたことは極めて有益でした。しかし、医学者という背景を持たれていない先生方・学生にどのように研究を分かりやすく、研究の意義を説明するのか考えさせられることになり。自分の取り組んでいるものについて改めて向き合う機会になりました。今回の経験を活かし、将来のキャリアを積んでいく上での糧としたいと思います。



Flash talk by poster presenter の様子

【謝辞】

今回の合同シンポジウムでの発表に際しまして平素より多大なるご協力をいただいております森井英一教授をはじめとする病態病理学教室の先生方に感謝申し上げます。また、本シンポジウムに私ども学生を参加させていただきました石井優先生、医学科教育センターの和佐勝史先生、河盛段先生にもこの場をお借りして感謝いたします。

また、OIST のプロボスト Mary Collins 先生、研究担当ディーンの山本雅先生を始め、OIST でお世話になりましたすべての関係者の皆様に御礼申し上げます。

末筆となりますが、岸本忠三先生、また岸本国際奨学金関係者の方々に多大なるご援助をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。このような貴重な経験を可能にしてくださり、本当にありがとうございました。



OIST キャンパスツアーにて

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

－ MD 研究者育成支援事業 －

医学部医学科 5 年

学籍番号 ***** 氏名 U・Y

私は2020年1月20日から21日の2日間をかけて行われた、沖縄科学技術大学院大学（OIST）と大阪大学の合同シンポジウムに参加しました。学部2年時からB型肝炎ウイルスのコアタンパク質におけるリン酸化と細胞内局在との関りをテーマに研究を進め、今回本シンポジウムにてポスター発表の機会を頂きました。

ポスター発表の間ではOISTの博士課程の学生とお互いに質問をしながら活発な議論が行われました。様々な質問や意見を受けたことで、今まで気が付かなかった実験の問題点や新たに探求したい問題を考える機会を得ました。また、OISTの学生達の研究レベルは非常に高く、自らもより一層研究に励んでいこうととても刺激を受けました。

また、OISTと本学の先生方の研究内容についての非常に興味深い講演を数多くお聞きし、自らもこのような研究をしてみたいと改めて将来の目標を持つことができました。

本シンポジウムでの貴重な経験を糧に、より一層精進してまいります。

最後になりますが、岸本忠三先生、MD研究者育成プログラム関係者の皆様には多大なご支援を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

2019年度岸本国際交流奨学金による活動実施報告書

— MD 研究者育成支援事業 —

医学部医学科 5 年

学籍番号 *****

氏名 S・Y

活動の期間: 2020 年 1 月 20 日 2020 年 1 月 21 日

活動の概要: 第 2 回 OIST-Osaka joint symposium

活動の内容: 口頭・ポスター発表 およびセミナーの参加

大阪大学と OIST の先生から、神経、免疫、ゲノムなど幅広い分野に渡り、基礎研究のレベルから臨床試薬の開発まで様々なプレゼンテーションを聞かせていただきました。各プレゼンテーション後に有意な質問応答時間もでき、大変勉強になりました。2 日目は大阪大学と OIST の学生からの研究を発表した後、OIST の大学院生とお互いに興味深いディスカッションができ、非常に刺激を受けました。終了時に OIST の施設を案内して頂きました。OIST では基本的な機械が数多く揃えられているのはもちろんのこと、世界最新の機材も設置されています。建物自体は大変快適であり、図書館やディスカッションコーナーなど充実に設けられています。また、世界各国からの有名な研究者が集まることより、指導やディスカッションができ大変適した環境であると感じました。将来的に、このような研究所で医学部の知識を応用し、医学の発展ために貢献できたらと思いました。

最後にこの場を借りて、これまでの研究活動と学会参加を支援してくださった岸本忠三先生と MD 研究者育成プログラム関係者の皆様、心から感謝の気持ちを申し上げます。